

メドレー代表取締役 豊田剛一郎

医療の高度化や高齢化によって医療費は膨らみ続けている。その金額は2015年度で42兆円に上る。財源の確保や効率化が喫緊の課題だ。しかし医療の現状は日本の未来を見据えた取り組みを起こしづらい仕組みになっている。

例えば、医療サービスの公定価格である診療報酬改定の仕組みだ。2年に1回改定されるが、非常に入り組んだ報酬構成があるため、どうしても対症的な手当てにとどまり、長期的な視野を持った大きな変化は起こしづらい。一番の問題は「日本の医療を変えなきゃいけない」と危機感を持っている人は多いが、実際に行動にまで移す人がほとんどいないということだ。役人は2〜3年で担当がかわってしまっし、多くの医

## 医療の未来、他人任せにしない

師は現状を変えようにも目の前の患者のことが最優先となり、身動きが取れない。

医療は「身近な他人事」だ。体調が悪ければ病院に行くが、一方で医療保険財政がどれだけ逼迫しているのか、そもそも医療にはどれほどのお金がかかっているのかを知っている人はほとんどいない。

それを「自分事」にしていく必要がある。身近に感じるようになれば、自分の地域が抱える医師不足や病院ベッドの過剰などの問題に目が向かうようになる。それがひいては、日本全体の医療の問題を解決していく上での大きな後押しになる。

筆者が代表取締役を務める会社ではオンラインの医療事業を手掛けている。「医師が編集する患者のためのウィキペディア」だ。

インターネット上の医療情報は玉石混交。自分はどうな

病気なのか、治療法は何があるのか、そもそもどこに医療機関に行けばいいのか。そうした疑問に対し、それなりに信頼の置ける答えを見つけれれる場所をつくることで、医療リテラシーを身に付けてもらえると思う。

医療のことが分かるようになれば、医療の抱える問題も身近に感じられる。医療の課題を解決しようとする時に、多くは既存の枠組みの中でどう解決するかという議論になる。物事の輪郭をこう決めてしまつと、大きな変化は起こらない。

国民皆保険制度の難点の1つに患者がコスト意識を持ちにくい点がある。例えば1度医療費を全額支払ってもらえば、それを還付するようになれば、医療のコスト感覚が身に付く。既存の仕組みを超えた取り組みを検討するの一案だ。